

日頃の対策で命を守る

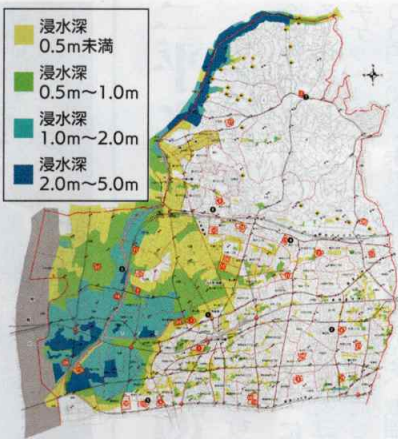
「ハザードマップで備えて」

西日本豪雨受け

西日本を襲った「平成30年7月豪雨」の被害を教訓に、茅ヶ崎市は市民に対して居住地域のハザードマップの確認を促すなど、水害に対する備えを呼びかけている。

県の洪水浸水想定区域図改定を受けて、市では

昨年12月に「茅ヶ崎市洪水(相模川)・土砂災害ハザードマップ」を改定。また、市内全体を俯瞰する「小出川・千ノ川・駒寄川および内水版」の見直しを進めている。マップには、浸水被害



市内全域のハザードマップ

被害想定ごとに色分けして表示。大雨や台風などで災害が予測される場合に、全40カ所の避難所のうち早期に開設される8カ所の「早期避難所」の情報や、避難時の注意事項などが掲載されている。マップに付属している解説版では災害時に市から発令される避難情報を紹介。「避難勧告」の前段階「避難準備・高齢者等避難開始」は、「高齢者や移動に時間を要する人への避難開始の合図となっていること」など防災に関する役立つ情報がまとめられている。

市防災対策課は「豪雨による河川の氾濫などでは、人的被害が出るまでにタイムラグがあり、早期の対応で被害が避けられる場合がある。居住地域の情報を確認して有事

に備えて」と話した。ハザードマップは同課で配布しているほか、市HPで閲覧可能。問い合わせは同課 ☎0467・82・1111へ。

防災に生かす「女性目線」

マザーアース茅ヶ崎が発足

女性の視点や感性を防災など地域課題に生かすコミュニティ



ミーティングを行うメンバー

「マザーアース茅ヶ崎」が、8月8日に発足した。きっかけは市内の30代〜70代の女性10人が、自治会や行政と対話する中でより生活に密着した情報の必要性を感じたこと。山田秀砂代表(66)は「東海岸南在住」は「日々の生活の中で感じる、防災への疑問やモヤモヤの解決ができれば、細やかな感覚を反映して住民目線の防災計画も作成し、行政に発信したい」と話す。

月に数回行っている公開ミーティングでは、東日本大震災時の「釜石の奇跡」と「大川小の悲劇」を具体的事例に「命の差が生まれてしまった理由」について検証。防災・減災のアイデアを出し合い、住民主体の防災計画を立てていくといい、今後は独自に市の全広域避難場所の検証も行っていく予定だ。

小3・小5の2児の母親である亀鶴綾子さん(43)は「常盤町在住」は「各世代の女性の声を集め、それぞれの不安をシェアできる場所でありたい」、登尾泉美さん(37)は「東海岸南在住」は「0歳と3歳の子ともともに自分が避難する具体的な方法など、個々の家庭に必要な知恵を得て発信したい」と語った。9月16日(日)には防災の専門家を招くイベント「ちがさき防災LOVE ACTION」を開催。会場はラスカ茅ヶ崎6階で、午前11時から午後2時。参加費無料。問い合わせは山田代表 ☎090・3236・6285へ。